2025年2月16日

年間第6主日

菊地 功 枢機卿　メッセージ

希望の巡礼者としてこの聖年を歩んでいるわたしたちに、「貧しい人々は幸いである、神の国はあなた方のものである」と言う福音の言葉が、希望を生み出す真の幸いについて黙想するようにと促しています。

教皇様は、大勅書「希望は欺かない」に、「キリスト者の希望は、裏切ることも欺くこともありません。なぜならそれは、何事も何者も神の愛からわたしたちを引き離すことはできないという確信に根ざすものだからです」と記しています。この世界が生み出す物質的な富や名誉は、一時的な喜びを生み出すことはあっても、永続的な幸福の源とはなりません。なぜなら、真の幸福は神の愛に満たされたところにこそあり、その愛はわたしたちを裏切ったり欺いたりすることのない永遠の希望をもたらします。

とはいえ現実の社会は様々な苦しみに満ちあふれ、いのちの尊厳は常に危機に直面させられています。この現実の困難の中で、わたしたちは希望を見いだすことに困難を感じることがしばしばあります。教皇様は、「人生は喜びと苦しみが織りなすものだということ、愛は問題が増すとき試練に遭うということ、希望は苦しみの前ではついえそうになるものだということを知っています」と「希望は欺かない」に記します。

その上で、パウロのローマの教会への手紙を引用して、「(わたしたちは) 苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを（ローマ5・3―4)」と記しています。

本日のルカ福音と同じイエスの言葉を記すマタイ福音には、八つの「幸い」が記されていることから、このイエスの教えを「真福八端」と呼んでいます。ルカ福音には四つの幸せと四つの不幸が記されています。教会のカテキズムには、「真福八端はイエス・キリストの姿を描き、その愛を映し出しています。受難と復活というキリストの栄光に与る信者たちの召命を表し、キリスト者の生活を特徴づける行動と態度とを明らかにする」と記し（カテキズム1717)、苦しみと栄光が神においては表裏一体であることを指摘します。

苦しみや忍耐というこの世では「幸い」とは考えられない中に希望を見いだすという、逆説的な信仰者の生き方の中にこそ、神の祝福があることを、このイエスの言葉は明確にしています。わたしたちが真の希望に満たされて歩み続けることができるために、この世界で当然だと考えられる幸せの基準の中で生きるのではなく、キリストとともに苦難の道を歩み続けること、また苦難のうちにある人たちとともに、真の希望を見いだすために歩み続けることが求められています。

苦しみが絶望に支配されることのないようにするために、苦しみの前で何も挑戦をせず諦めてしまうのではなく、互いに支え合い、希望に到達する道を探りたいと思います。そのためにも、神からの賜物であるそれぞれのいのちの尊厳が守られる社会が実現するために、互いに神のいつくしみと愛を心に抱き、それを目に見える形であかししながら、力を合わせて歩み続けることが必要です。ともに旅を続ける希望の巡礼者でありましょう。